配置薬に使用される生薬の特徴⑩

村上　守一

シャクヤク（芍薬）　*Paeonia lactiflora* Pallas（ボタン科 *Paeoniaceae*）

「立てば芍薬、座れば牡丹」と形容されるように一般には薬のイメージより園芸的な要素が強く、現在では広く親しまれている植物です。中国においても牡丹を花王、芍薬を花相と称し、観賞用として幾多の品種が作出され、栽培されています。

李時珍（明代）は「芍薬は婥約といふ意味だ。婥約とは美好の形容で、この草は花の姿態が婥約たるものだからこの形容詞を名としたのだ」と述べ、その美しさを表現しています。芍の字の語源も草冠に勺（はっきり目だつ）と書き、鮮やかな花の咲く草を指しています。

『神農本草経』（漢代）の中品に収載され、「邪気、腹痛を主どり、血痺を除き、堅積を破り‥‥」と記され、漢時代にはすでに用いられていたようです。梁時代（502～557）の陶弘景は「‥‥白くして長さ１尺ばかりある。餘處にもあるが多くは赤い。赤いものは少し利す」といい白いものが良品であることを示唆しています。宗時代の蘇頌は「今は諸處にあるが淮南のものが勝れている」といい、すでに栽培化され、産地化されていたようです。明時代の『本草綱目』（1590）には「既往には、洛陽の牡丹、楊州の芍薬といつて、天下に冠たるものとしてあつたが、今も薬用にはやはり楊州のものを多く採用する」とあり薬用としての栽培が盛んであったことがわかります。

日本では平安時代に伝わったとされ、『諸国俚人誌』（850 年代）に最初に植えられた記録があります。『延喜式』（905～927 年）、『本草和名』（918）等に「衣比須久佐（えびすぐさ）」、「衣比須久須里（えびすぐすり）」、「奴美久須利（ぬみくすり）」等の和名で記載され、外国（夷）から渡来した薬を意味し、薬用として用いることが推測できますが、実際に植物が渡来していたかどうかははっきりしません。中国の芍薬が確実に栽培された記述は室町時代の生花に関する書物『仙伝抄』（1445）まで下らなければなりません。江戸時代に入ると、その記録は多くなり、『花壇綱目』（1681）や『花譜』（1695）に多くの品種が収載され、明治時代以降は神奈川県立農事試験場で品種改良に取り組まれ、昭和 7 年に新品種 700 品種が発表されました。戦後は多くの欧米切花種が導入され、昭和 40 年代には新潟県で 2 新品種の種苗登録がなされました。

植物の特徴

中国東北部、モンゴル、東シベリア、朝鮮半島北部に分布する多年草です。茎は直立し、草丈は60～90 ㎝になります。葉は深緑色で互生、小葉は2～3回深裂し、花期は5～6月で、大型の花を頂生します。*P. lactiflora* 以外では中国西部原産の *P. veitchii*、日本～中国北東部に分布するベニバナシャクヤク（*P. obovata*）、本州以南、朝鮮半島に野生するヤマシャクヤク（*P. japonica*）などがあります。

シャクヤク

ヤマシャクヤク

生　　薬

白芍は根の皮を剥いで乾燥し、表面を白く仕上げたもの。真芍は皮を剥いで蒸してから乾燥したもので、質がかたく表面に半透明感があります。赤芍は皮付きのまま乾燥したもの。

白芍

成　　分

ペオニフロリン、アルビフロリン、ペオニン、タンニン、安息香酸等。

薬効および使用法

胸腹脇肋の疼痛、下痢による腹痛、自汗盗汗、陰虚発熱、月経不順、崩漏、帯下を目的に葛根湯当帰芍薬散芍薬甘草湯四物湯桂枝加芍薬湯等の漢方処方に配合されます。